

書評

Harrison, Chioe, Louise Nuttall, Peter Stockwell and Wenjuan Yuan (2014), *Cognitive Grammar in Literature*. Amsterdam: John Benjamins Publishing. (xiv + 255pp.)

認知言語学は、言語を他の認知活動から独立した機構とするのではなく、認知や身体経験に深く関係していると考え、言語学の各分野を認知科学の諸分野の知見と統合しようとする言語学の分野である（中野他 2015）。1980年代に提案されて以降、文字どおりその認知度を高め、現在最も精力的に研究が進められている分野である。本書は、認知言語学の枠組みの中でも言語使用に重点をおく用法基盤モデルを採る認知文法の視点から、文学作品を分析した論文集である。4人の編者らは List of contributors によると、いずれも the school of English, the university of Nottingham に所縁のある研究者である。

本書の構成は、まず認知文法を牽引している Ronald Langacker による Foreword があり、続いて、4人の編者たちによる Chapter 1 が全体の序論の役割を果たす。Chapter 2以降 Chapter 14までが本論に相当するわけであるが、これらの13の章は散文を扱った Part I (Chapter 2-7) と韻文を扱った Part II (Chapter 8-14) にそれぞれまとめられている。最後に Afterword

として 'from Cognitive Grammar to systems rhetoric' と題された認知言語学者の Todd Oakley の結語によって締めくくられている。以下では、まず各章の概略をそれぞれの章のキーワードを中心に簡潔に紹介し、最後に本書の評価を述べる。

Chapter 1は本書の目的と各章の概略を示した全体の Introduction であるが、加えて、文学の言語分析に関連する認知言語学の基本概念：construal, specificity, prominence, action chains, dynamicity, perspective, discourse 等について簡単な説明がなされている。認知言語学に親しみのない読者への配慮が見られる。

Chapter 2 (Peter Stockwell, 'War, worlds and Cognitive Grammar') は、次の3つの目的を設定している：a) 文学作品の文体研究に認知文法を効果的に用いることが可能か；b) それが可能なる場合、認知文法は、textual style, discourse texture, literary interpretation をその枠組みの中で関連付けて説明できるか；c) 認知文法の視点による文体研究によって得られた結果が認知文法の発展に貢献する可能性はあるか。以上の目的で、H. G. Wells の *The War of the Worlds* の第1章と第5章からの2つの段落が分析されている。分析に用いている認知文法概念は、potency, attractors, clausal grounding, force dynamic modals, potential/projected reality, subjective/objective construal,

reference point model, dominion, semantic prosody, lexical priming, spreading activation である。

Chapter 3 (Michael Pleyer & Christian W Schneider, 'Construal and comics: the multimodal autobiography of Alison Bechdel's *Fun Home*') は、グラフィック・ノベル(長編コミック)というジャンルの Alison Bechdel による *Fun Home* を認知文法概念である, construal, profiling, viewing arrangement の点から分析した論考である。構成は, *Fun Home* の概略が述べられた後, 認知文法における中心概念の一つである construal と関連する profiling と viewing arrangement の説明があり, 続いてその視点からの作品の分析がなされる。最後に, Langacker が認知文法を拡張して談話現象を扱う際に導入した, 談話中において話し手と聞き手に共有されている情報の集まりである current discourse space mode (CDS) への言及があり, CDS を文学作品の分析に応用する利点について指摘する。

Chapter 4 (Chloe Harrison, 'Attentional windowing in David Foster Wallace's 'The Soul Is Not a Smithy') は, 「作家が効果的な物語を構築する際, いかにして特定の言語表現を選択するのか」という問いに答えを出すことを目的としている。分析対象の 'The Soul Is Not a Smithy' は, 学校を舞台とした人質事件という非常に特殊な状況が設定されているにもか

かわらず, ストーリーは人質事件そのものではなく, 犯人である代用教員 (Mr Johnson) がまさに事件の最中に見る白日夢の描写が大半であるという, 非常にユニークな短編小説である。Chloe Harrison は, この特殊な短編の分析には Langacker による profiling だけでは不十分として, Talmy の windowing of attention 理論を併用する分析を提唱する。

Chapter 5 (Sam Browse, Resonant Metaphor in Kazuo Ishiguro's *Never Let Me Go*) は, 認知言語学における当初からの基本的概念である metaphor の視点から, Kazuo Ishiguro による *Never Let Me Go* からの 1 文 (*It seemed like we were holding on to each other because that was the only way to stop us being swept away into the night*) に注目してその 1 文の分析から作品全体のテキスト性を考察した論考である。著者は, まず近年の認知言語学の視点からの文学作品研究において, その概念構造の分析が強調されるあまり詳細な作品の言語分析あるいは文体分析がおろそかになっている状況を指摘し, 言語表現の事実を考察することの重要性を指摘する。続いて, Conceptual Metaphor Theory (Lakoff & Johnson 1980, Lakoff 1993) の 枠組み と, grounding, force dynamics, epistemic modals, construal, dominion といった認知文法概念を用いて考察している。

Chapter 6 (Louise Nuttall, 'Constructing a text world for *The*

Handmaid's Tale’)では, Gavins (2007) や Werth (1999) らによって提唱された Text World Theory に Langacker の認知文法の考え方を取り入れることでより詳細な言語学的テキスト構造の分析が可能になると論じられている。Text World Theory は Halliday の Systemic-Functional Linguistics のアプローチに影響を受けており, 認知文法と親和性が高い理論である。さらに近年は読者のテキストの読みについて心理学的傾向が見られることから認知文法との距離を増々縮めつつある。論考での分析対象の Margaret Atwood による *The Handmaid's Tale* を, 特に認知文法における prominence の視点から profiling, trajectory/landmark, alignment 等の概念を用いて分析している。

Chapter 7 (Elzbieta Tabakowska, ‘Point of view in translation: Lewis Carroll’s *Alice* in grammatical wonderlands’) は, 文学作品を翻訳する際に問題となる point of view (視点) に焦点を置いた論考である。まず著者は従来の Cognitive Translation Study においては, 研究の焦点は metaphor, mental spaces construction, conceptual integration と限定的であり, 認知文法プロパーの概念を翻訳の過程や最終的な翻訳作品の分析に用いられることは稀であることを指摘している。そして, この論考はそのギャップを埋める一つの試みであると位置づけている。具体例として, Lewis

Carroll の *Alice in Wonderland* を著者がポーランド語に翻訳する過程を話法 (direct speech, indirect speech, free indirect speech), 直示表現, 進行形, 法助動詞, 法副詞などに注目して構造が異なる言語間の翻訳の困難さを記述している。従来にない新しい試みは, 日英語翻訳にも新しい視点を与えるものである。

上述したように, 続く Chapter 8-14 は韻文を例にとり認知文法の視点から考察した論考である。評者は詩文学に明るくないので, Chapter 13のみをやや詳細に紹介することとし, 他の章については, それぞれの章で取り上げられている作品と各著者が注目した視点を簡潔に紹介するのみにとどめる。Chapter 8 (Clara Neary, Profiling the flight of ‘The Windhover’) は, ヴィクトリア朝詩人 Gerard Manley Hopkins のソネット ‘The Windhover’について, profiling, 特に動詞の使用に係わる relational profiling に注目して, figure/ground, trajectory/landmark 等の概念に言及しつつ詩人が何を際立たせているかを考察する。Chapter 9 (Anne Pdivarinta, Foregrounding the foregrounded: the literariness of Dylan Thomas’s ‘After the funeral’) も前章と同様に figure/ground, trajectory/landmark の考え方を手掛かりとして Dylan Thomas が ‘After the funeral’ で構築した ‘the detached treatment of grief’を探ることを目的としている。Chapter 10 (Marcello Giovanelli,

Conceptual proximity and the experience of war in Siegfried Sassoon's 'A Working Party') においては、第一次世界大戦時の最前線における塹壕で実体験した恐怖を描いたことで名高い戦争詩人 Siegfried Sassoon の 'A Working Party' 中に表れる -ing 形の分布、三人称代名詞 he, reference point (参照点), action chain (行為連鎖) が分析され、'A Working Party' がどのように conceptual proximity (概念的近接性) を生み出しているのかが検証される。Chapter 11 (Mike Pincombe, Most and now: tense and aspect in Balint Balassi's 'Aldott szep piinkiisdnek') は、ハンガリー語による詩 'Aldott szep piinkiisdnek' を英訳する際に問題となる時制と相を認知文法の点から考察した論考である。Chapter 12 (Wenjuan Yuan Fictive motion in Wordsworthian nature) は、Talmy (2000) らが提唱する fictive motion (虚構的移動) の概念を用いて Wordsworth の自然描写を考察している。最終章の Chapter 14 (Alina Kwiatkowska, Representing the represented: verbal variations on *Vincent's Bedroom in Arles*) では、ゴッホ有名な絵画『アルルの寝室』に触発された数編の詩、いわゆる ekphrasis poems が取り上げられる。Ekphrasis poems には、絵画の鑑賞者、詩の作者、詩そのものと複雑な関係が存在するが、著者はこの点に関心をもち、reference point, dominion, target

という認知文法の概念に言及してその複雑性を検討する。

Chapter 13 'The cognitive poetics of *if*' は、英詩の伝統の中で条件節の構造がいかに使用されてきたについて、14世紀の Chaucer から現代の Atwood までの13の詩に言及しつつ考察したものである。著者の Craig Hamilton は、the Universite de Haute Alsace に所属し、文学作品の認知言語学的研究を精力的に進めている。論考では、まず条件構造は言語学の分野では詳細に研究されているが、文学批評、文体論では必ずしもそうでもない研究状況が指摘される。続いて、*British National Corpus, Corpus of Contemporary American English* を検索した結果、*if* 節の頻度は、書き言葉においてはフィクションのジャンルで多用されることが示され、文学作品における条件構造を研究する意義が強調される。3. Definitions では、様々な視点から *if* 条件構造の分類が紹介されるが、最終的に認知言語学的アプローチによる Dancygier & Sweetser (2005) の考え方と Fauconnier (1994, 1997) の Mental Spaces Theory が採用されることが述べられる。4. Poetic examples では、Norton と Longman のアンソロジーから、14世紀から20世紀に渡る13の詩から適切な用例の引用があり個別に説明される。特に著者が注目するのは、a) 条件節 (P) と帰結節 (Q) の統語上の位置 (P, Q のどちらが先行するか)、b) 1つの条件構造における P/Q

それぞれの数、c) 節中の(法助)動詞の時制・相・法の振る舞いである。分析の結果、a) については、If P, Q: 8例、If P Q: 4例、Q if P: 1例、Q, If: 用例なし。b) については、例えば、If poisonous minerals, and if that tree/Whose fruit threw death on else-immortal us, /If lecherous goats, if serpents envious/Cannot be damned, alas, why should I be? (Donne, *Holy Sonnets*, 1635) のように4つのPに対して修辭疑問文Qが1つといた、PとQが数において不均衡な構造は13例中3例で少数派であり、ほとんどはシメトリカルな構造をとっている。c) については、「Pが現在時制でQが現在時制/未来志向の表現」と「仮定法過去」の構造をとるものが11例と大半であったと述べる。この論考の全体的な記述・説明より著者が条件構造に焦点を置くのは、英詩における条件構造の歴史的変化や発達の考察といった文体史的な関心からではなく、時代の変遷に関わらずに英詩においていかに条件構造が‘real situations’に対する‘imaginary situations’を表現する手法として用いられていたかという事実、また同時に、詩の中の条件構造に注目することでその詩のimaginationを理解することが可能になるであろうという視点からであること分かる。最後に、今後の課題として、接続詞ifを伴わない条件構造も含めたより多くの用例による頻度重視の考察と詩人自身による改訂がなされた場合、条件構造に変

化があったかどうかといったgenetic criticismの点からの考察に加えることにより、より説得力のある説明が可能となると締めくくっている。

以上が各章の概略の紹介であるが、以下簡単に本書の評価を述べたい。まず、評価すべき点として、本書は新しい文学作品の言語学的分析手法の可能性を、近年その発展が著しい認知言語学、特に認知文法の成果を応用して散文と韻文の様々な作品を考察することによって例示した意欲的な提案であり、完成度と説得力の点からは賛否両論があると思われるが、研究の方向性としては大いに評価されるべきである。伝統的あるいは言語学的文体研究は、実質的に1970年代以降進展していない状況である。一世を風靡した生成文法理論も言語形式をあまりにも重視するもので、テキストの意味や効果が重要である文学の言語分析には不向きであることは明らかである。本書で提案されている認知文法を応用した文学言語へのアプローチは、言葉の意味を重視した理論からの新しい試みであり、今後の認知文法の発展につれ、さらに説得力が増すことが予想できるのみならず、文学の言語分析から認知文法理論への有益なフィードバックが可能であるであろう。次に、各章の論述の構成は、概略すると「目的→理論/専門用語の説明→作品の分析→結論」の形式をとり、第1章の記述と「理論/専門用語」の考え方が理解できれば、理解しやすい構成となっている。しか

し、これは反対に、認知文法の基本的な考え方と専門用語に馴染みがないと、作品分析を十分に理解することは困難であるという欠点でもある。したがって、本書はある程度認知文法についての素養がある読者向けであって、決して初心者向きではないことを注意したい。また、これはおそらく本書は実質的には論文集であるという編集上の問題によるものであろうが、各章の「理論／専門用語の説明」の部分で、同じ概念や用語（例えば、construal, profiling, figure, grounding 等）について繰り返し説明があり冗長さが感じられ、認知文法に精通している読者には不満となるかもしれない。この点に関して、作品の分析方法と考察も加えて、是非認知言語学をプロバーとする研究者からの評価も聞きたいところである。認知言語学は、本来人間が持つ一般的な認知能力の反映として「言語」を捉える学際的な研究分野であり、言語表現の一側面である文学作品の言語も当然その考察対象である。学際領域にふさわしい各研究分野の研究者の協力による今後の認知言語学的文学研究の発展を期待したい。

References

- Dancygier, B. and E. Sweetser (2005) *Mental Spaces in Grammar*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Fauconnier, G. (1994) *Mental Spaces: Aspects of Meaning Construction in Natural Language*. New York: Cambridge University Press.
- Fauconnier, G. (1997) *Mappings in Thought and Language*. New York: Cambridge University Press.
- Gavins, J. (2007) *Text World Theory: An Introduction*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Lakoff, G. and M. Johnson (1980) *Metaphors We Live By*. Chicago: University of Chicago Press.
- Langacker, R. W. (1987) *Foundation of Cognitive Grammar Vol. 1*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, R. W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. New York: OUP.
- 中野弘三他監修 (2015) 『最新英語学・言語学用語辞典』東京：開拓社。
- Talmy, L. (2000) *Toward a Cognitive Semantics, Vol. 1: Concept Structuring Systems* Cambridge: MIT Press.
- Werth, P. (1999) *Text Worlds: Representing Conceptual Space in Discourse*. London: Longman.
- 水野 和穂 (広島修道大学)